第５回車座会議　議事概要

１　日　時：令和６年８月28日（水）13：00～14：00
２　会　場：iti SETOUCHI
３　登壇者：湯﨑広島県知事、山口 慎太郎教授（東京大学大学院経済学研究科）、犬山 紙子さん、石川 敏郎さん（子育て層）、大川 巧人さん（独身層）、岡村 健太郎さん（子育て経験者）、掛本 智子さん（子供を持たない層）、松田 典子さん（子育てを終えた層）、柳谷 典子さん（子育て層）、吉弘 翔さん（司会・広島ホームテレビアナウンサー）
４　概　要

【オープニング】

（出席者紹介）

（広島県の少子化の現状と課題等について、広島県担当者から説明）

【論点１：子育てを社会全体で応援していくことは必要だと思いますか？必要だと思う場合は、そのために何ができると思いますか？（個人レベル、社会全体レベル）】

吉弘：　論点について、必要だと思う方は挙手により回答いただきたい。
⇒　全員挙手（必要だと思う。）
それでは、挙手された方から少し意見を聞いてみたい。

松田：　子育てをしている保護者の方々は、核家族や、地域との関係が薄れてきている中、１人で子育てを頑張っている方が多い。心配や悩みを誰にも相談できずに、頑張っている方をたくさん見てきた。そういった方々に対し行政の支援や社会全体で支えていくことが必要。

岡村：　私自身がひとり親で子育てする中で、医療費や手当に助けてもらったと実感している。特にひとり親の方は時間や経済面など色々大変なので、優先順をつけながら支援いただきたい。

大川：　私自身が先天的な異常をたくさん持って生まれたが、色々な支援をいただいた。その経験から、子育てを社会全体で応援することが必要だと考えている。経済的な支援はもちろんだが、心理的なところに対するアプローチが、私自身、すごく心の助けになったので、その辺の拡充について、期待するところ。

吉弘：　３名の意見を聞いて犬山さんどうか？

犬山：　皆さんの意見は本当にその通りだと思いながら伺っていたが、例えば松田さんのお話でいくと、今孤立しやすい親が、そういう社会の中で、心理的なケアという話もありました。社会全体で孤立させない、経済的支援も必要だが、心理的な支援も必要だとすごく感じた。

掛本：　私は、不妊治療をして子供を持てなかった。なのでみんな私の子供だというぐらいに思っており、子供に対しては、助けられることはやりたいと思っている。不妊ピアカウンセラーの資格を取得した。その中で、不妊治療中の人は、人の子供のことは考えられないという意見もある。なので心理的なサポートはすごく必要。

犬山：　私もベビーカーで子供を連れていたときに、小学生くらいの子どもが自分の子供をあやしてくれる姿に、孤独感が薄れた気がする。逆に孤立してしまうと子供を愛しているにも

関わらず、虐待に近い関わり方になることもあるので、心理的な関わりや社会全体のムードが大事。

吉弘：　山口教授はみなさんの意見を聞いてどうか。

山口：　（当事者の視点ではなく）別の視点から話をすると、子供を持たない人、子育てが終わった人からしたら、何でよその子供の子育てを応援しなきゃいけないんだという不満を思われる方もいるかもしれない。ところがそういう人も子供が健全に育つことから、利益を享受することから無縁ではない。なぜなら、子供たちが育っていくことで将来の地域の経済社会が良くなる。回り回って、自分は子供を持たなくても広い意味で利益を享受する存在であるので、子供を持たない方でも、子育て支援をしていくということは、自分にもプラスになる。

柳谷：　助産院をしている。自身も子供が３人いる中で、仕事もしながら子育ては大変なことがある。地域の助けがあって、仕事や生活が回っていると感じている。同時に（仕事柄）助産院ではお母さんたちにすごく出会うが、話を聞くと、自分自身がどこで出産したいかといったことが、病院が少なくなっているので選びにくくなっており、自分がどういうふうに、妊娠・出産を迎え子育てをするかということを考えるところが少なくなっている。地域の取り組みが少なくなっているから減っているのではないかと助産院で勤める中で感じており、子育てを社会で応援するというのは、自分の地域を活性化することにもつながるし、子供たちがのびのびと育っていく場所を作ることにもつながるので、応援していくことは必要。

石川：　私は３歳と１歳の２児の父で当事者という立場で参加。子育ては非常に楽しく、とても大変。そんな日々を送っていると、プラスアルファで、仕事・家事をやらないといけない。よく両立を目指すというキーワードがあるが、実際は「３立」している状態で、非常にバランスをとるのが難しい。体力と気力には自信があったが、私自身、孤立して辛い子育てをしたという経験もあり、社会・地域など、皆さんの応援があり、前向きに子育てできるといいなと思っている。

吉弘：　みなさんの意見を聞いて知事いかがか？

知事：　調査をすると、社会全体で子育てを応援すべきというのは９割ぐらいの人がイエスと答える。今日もアンケートと同様に、全員がそのように言われていて、とても前向き。一方、子育て当事者の方、ひょっとしたら石川さんもそうかもしれないが、受けとめる方は支えられていると感じるのが４分１ぐらいの人しかいない。このギャップがどこから来るのかというところは大きな課題。

　それから心理的という話もあったが、今、福山市もとても熱心に取り組んでおられるが、ネウボラという取組をしている。これは、子育ての当事者の皆さんが、包み込まれてるような安心感を持ってもらうことがコンセプトになっており、妊娠・出産から子育てを一貫してというふうに言われるが、それは当たり前で、何をしようとしてるかというと、安心感とか支えられているということを持ってもらう。こちらもまだまだ、皆さんには実感していただけてないというのが、実態だと思うので、どう進めていくかが大きな課題。

吉弘：　子育てを社会全体で応援していくということに対して、具体的な内容をお話しいただきたい。フリップに書いてもらったが、犬山さん気になるものはあるか。

犬山：　民間でも相談できるシステムづくりも必要だと思うし、今知事が言われていたネウボラも、知らないから利用してないという方はいらっしゃると思う。私自身も子育てをしていて、やっと知ることができたサービスもあったので、周知も大切なのかなというところ。あと、ひとり親支援は深刻な問題なので、その話を伺いたい。

岡村：　年収の壁の問題がどうしてもある。年収が多くて助けてもらえないという話を耳にする。ひとり親はお金だけ（の問題）ではないと思うので、時間がかかることやひとりでできないことがあり、経済的に、もう少しプラスすれば、クリアできる方もおられると思うので、もう少し（支援を）受けやすくして欲しい。

吉弘：　山口教授はいかがか。

山口：　支援は必要だと思うが、広島県も含めて日本で伸ばしていく余地があるなと思うのは、男性の育児参加。日本は他の先進国と比べても男性の家事育児への参加が非常に低い。そして男の人が家事育児に参加している国ほど出生率が高いという傾向が知られている。その観点からみると、石川さんが書かれている「パパ向け支援」とは具体的にどんなものか？

石川：　昨年、育児休職を１年間取得した。キャリアや収入の面で非常に不安があったが、自治体や勤務先からも、背中を押してもらった。いざ育児の世界に飛び込むと知らないことばかりで、どこに相談していいか分からないという現状があった。いろんな制度を調べると、母子に関わる支援メニューが主。パパ向けの支援が少なく非常に困った経験があるので、育休を推進して旗を振るのであれば、それとあわせて、男性向けの支援という２軸で検討していく必要があるというところフリップに書かせてもらった。

山口：　経済的支援は必要だが、それだけではないということがよくわかるお話だった。情報も足りていないし、メンタルサポートも不足している。社会には、子育ては女の人がするものだという思い込みや、そういう伝統的な価値観に縛られている部分がある。それが理由で、男女にとって子育てがしんどいものになってしまっているので、そこから自由になっていくのは非常に必要な動きだと思う。

吉弘：　松田さんは経済支援という面でも色々書かれているがどうか。

松田：　子育て応援プロジェクトという活動している中で繋がっている子育て応援の団体がたくさんある。取組についてインスタなどで情報発信しているが、全然周知されていない。そういう支援の活動を困っているお父さんお母さんにつないでいくような、支援の仕方も必要だと思い、そういう活動を広げていくようなことを続けている。

吉弘：　大川さんも心理的支援をあげているがどうか。

大川：　私は人生で５回手術しており、来月にも６回目の手術を予定している。心理的な面、親や学校の先生が聞いてくれるとか、それだけではなく、周りの身近な人以外からすごくいろんな相談をさせてもらった。そういう面で、もっと子育てが当たり前に支援されるものとして心理的支援が必要だと考える。

掛本：　ひとり親の友達が周りにたくさんおり、医療費が安いのは本当助かるという声が多く、無料になればもっと助かるかなと感じる。

柳谷：　妊娠中にしっかり相談できるところがあるのはすごく大事。お母さんたちの話を聞くと、妊娠中に不安があってもなかなか相談をできるところが見つけられず、私のところ（助産院）に出会ったときに、「助産院っていうところがあるんですね」、「病院でしか会えないというふうに思っていたけれど、こういうふうに身近に助産師さんって近くにいて、こんな

ふうに会うことができるんですね」と言われたときに、身近に相談できる場所、病院とか市役所などの自治体もあるが、身近に出産や育児のことについて相談できる人がいることが、意外に知られておらず、知ったきには（タイミグとして）遅く、心や体がしんどくなってやっと気づくということが多いなと感じている。支援に関しては、妊娠が分かったときや、届け出をしたときなどに、知ってもらえるチャンスが平等にあると、もっと、出産、育児について前向きにとらえて進んでいけると感じている。

犬山：　先ほど知事が言われたギャップの実態が見えてきたと思う。支援したい人や団体があるけれども、それが周知されてないから、（当事者は）支援されてないというギャップが生まれてくる。私も病院で私初めて知ったこともあったが、例えばもう会社や地域のその自治体とかなどでまとまった情報が、わかりやすく、例えば、アウトリーチ型のLINEで情報が届くとか、情報発信があると、「私は支援してもらっている」と思えるのではと感じた。

吉弘：　知事、いかがか。

知事：　我々が注力してるのはさっきも言ったようなネウボラ。これは妊娠してからではあるが、妊娠をしたら、必ず100％ネウボラに行っていただくというところで、そこですべての支援策、相談先へつなぐことができる仕組みになっている。それが妊娠するまで伝わってないいというのがあると思う。妊娠の前からそういうものがあるということを伝えていく必要がある。いろんな支援があるというのも、ひょっとしたらまだまだ（周知が）不十分かもしれない。特に、ネウボラの機能は、不安や困っている家庭に対し、支援と結びつけることが非常に大きな機能なので、まだまだ発揮しないといけないというところ。

犬山：　ネウボラってすごくいいところ。そこで子育ての悩みも完結する。

吉弘：　これを、県民の皆さんがいろんなところで、ネウボラに行こうというのを合言葉のようにする。

知事：　我々の方の考え方としては、６歳になったら小学校へ行くというのは誰も疑問に思わない。まずは妊娠したら、ネウボラに行こう、当たり前に。そういう当たり前の存在になればいいし、していかなければならないと思う。

【論点２：行政の子育て支援策を一層強化していくには、追加の税負担も想定されますが、そういった形で社会全体で子育てを支援することについてどう考えますか？】

吉弘：　論点に入る前に、支援策（資料P13）について知っている人は挙手をお願いしたい。

⇒　４人が挙手（知っている。）

そのような中、仮に、支援を拡充した場合には追加の費用が必要となり（資料P14)、追加の税負担が想定されるが、支援の拡充が必要だと思われる方は挙手いただきたい。

⇒　４人が挙手（必要）

では、手が挙がった方から話を伺いたい。

大川：　（必要と回答）私自身がいろんな支援をいただいた経験があるからこそ、支援が拡充されるための追加の税負担はあってもいいと考える。

掛本：　（必要と回答）少子化と言われる中で、負担をしないと絶対子供を産みたいという人も増えないだろうし、やっぱり支援は何か必要ではないかと思う。

石川：　（必要と回答）当事者として、助けてもらっていることを実感しているので、当事者同士で支え合うという意味でも、納税という形で支え合いたい、世代が上がったときには、次の子育て支援を同じく納税という形で、支援したいと思っている。

松田：　（必要と回答）社会全体で子育てを応援していくというのは、税負担をすることによって、そういう気持ち・意識を持って子供たちを支えていくことは必要だと思う。子供たちを支えるのに、いろんな角度でやっていかないといけないが、ある程度、決まった中でやっていくというのは、中々難しいところがある。子育てというのは、税負担だけじゃなく、さっきも言ったように、経済的な支援だけでなく、人的な支援もいるし、そして子供たちや保護者が安心して過ごせる場もいるだろうし、本当に広く子育てを考えた場合に、社会全体で子育てを支援していくためには、ある程度の経済的な負担は、必要だと思う。今子育てをしてない方には無関係なように思えるが、先ほど山口先生が言われたように、回り回って、自分たちの老後を支えてもらったり、そして新しく生まれる子供たちを支援したりと、社会全体を支えていく子供たちを支え、育てていくということを考えれば、社会全体で支援をしていくことはすごく大事。

吉弘：　一方で手が挙がらなかった方々はどうか。

岡村：　（必要ないと回答）２点あり、１点は、なんでも無償化というのは、耳ざわりはいいと思うが、それ慣れると当たり前となり、支援してもらっているという気持ちが薄くなる。私の場合、医療費の支援をしてもらったが、病院に行ったときに幾らかでも、財布からお金を出すことで、これだけで済んでるんだという、その度に応援してもらっているなと感じていたので、まったくの無償というのは賛成できない。

　もう１点は、自分の子供たちが20歳前後だが、僕と同年代の20歳前後の子供たちを子育てしてきた世代は、支援が全部、後手後手、（必要な時期が）終わった後制度がスタートするというような世代なので、何もしてもらってないけど、税負担だけするというのは、疑問符だし、周りでもそういう意見はよく出る。

柳谷：　（必要ないと回答）少子化と言われるにも関わらず、なぜ増税をしないと賄えないのかというところが正直ある。私も子供が３人おり、応援する意味で、お金を出すのはもちろんのことだと思う。すごく大切なことだとは思うが、子育てしていて、子供の人数が少ないのに、それを支援するだけのお金がたくさんかかるというのはすごく疑問があるし、本当に増税以外のやり方はないのだろうかとすごく感じる。もっと模索をして欲しいし、無料にすればＯＫというだけではなく、それ以外の何か、地域でできることや、支援してくれてる人がいるのであれば、その方を一緒に交えながらできる、その増税以外のやり方があるんじゃないかというのが、私の中ではすごくある。

　税金（の負担）が増えたからといって、すごく充実し、ものすごく子育てしやすくなったと感じることがすごく少ない。私の周りの人達にも聞いたところ、税金（の負担）が上がったからといって、もっと出産をしたいと思った、子育てがすごくしやすくなった、子育てをする環境がものすごく変わって充実したっていう感じはないが、なぜ税金というか、お金だけが増えているというふうに感じるところがあるのは、ギャップの部分、いろんな支援はあるが、知ってる方もいると思うが、何かお金だけ増えた感じがするというマイナス面だけがひとり歩きしているような感じがしているので、もっと地域への取り組みや、

子育てをする取り組みというのは、若い人たちも含めて考えていくのがすごく大事なことなのではないかというところで、税負担だけで考えると、あまり賛成はできない。

吉弘：　色々な意見が出たが、知事どうか。

知事：　前回も、税金の使い方が何となく理解できないのに、負担が増えるのは嫌だというご意見もあった。一方、冒頭の説明にもあったように、経済的支援というのは、手当などいろんな形があり、給食費や医療費もそう。特に医療費は、我々すごく言われるが、これを全県的にやると数十億かかってしまう。お医者さんが、無料で診てくれたらというわけにもいかないので、お金がかかることにはお金が必要だというのは避けられない。

　柳谷さんがおっしゃったようなコミュニティや松田さんがおっしゃってたような民間の人がボランティアでやりますということも、増えるのはいいことだけれども、それは経済的支援では必ずしもない。多少、経済的に助かる部分もあるかもしれないし、子供を預かってくれたりといったことはあるかもしれないが、ニーズが高いと認識されている、経済的支援に対してはどうしてもお金がかかってしまうというジレンマはある。

吉弘：　こちらについても、具体的なものを書いていただいた。犬山さん気になるものはあるか。

犬山：　全部気になるところだが、石川さんの自宅訪問型サポート、これはどういったものか。

石川：　広島にはいろんな支援メニューがあり、拡充されていて、施設も、数で言えばすごく多い。ただ本当に困ったときに、自宅に来てくれる支援メニューが限られている。代表的なものではファミリーサポートという制度があり、マッチングすれば、家に来てくれるが、登録者の方が非常に少ないのと、希望数が非常に多いというところで、取り合いというかアンマッチが起きている。本当に大変なときに、一時預かりというキーワードが先ほど出たが、その日に預けられるかというと、希望通りではないし、お金もかかる。そんな中、私が実際に使ってみたのが、ホームスタートというサービス。先ほど犬山さんおっしゃっていただいた、アウトリーチ型の支援になると思うが、自宅に来てもらって、親の状況について話を聞いてくれて、情報を出してくれる。アウトリーチ型で自宅に入ってくれて支援が手厚かった。

犬山：　私も子育てをしていてすごく感じるところ。こういうサポートを、取り合いではなく受けられるのが分かっていたら、安心感につながり、じゃあ（もうひとり）産んでみたいという１歩になるのでは。

吉弘：　山口教授は気になるものはあるか。

山口：　私自身も子育てをするので、こういったものがあったら嬉しいなと感じた。一方で知事もおっしゃったように、財政的な負担がすごく大きくなってしまう。どれもあると嬉しいが、すごくお金がかかる。そうなってくると、効率的なお金の使い方が、行政に求められるようになる。岡村さんが先ほどお話しされたように、医療費も安いとありがたいんだけど、本当に無償にした方がいいのかと。経済学の研究だと、無料と100円200円でも料金を取るのは、人の行動が変わってくる。本当に今病院に行かなくてはいけないのかいついて、もう１歩立ちどまって考えてくれるようになる。そういう意味では、無償化ではなく、100円200円と少額の負担でも、大きく違いがある。

　さらに大学までの教育の無償化について、松田さんが書いていらっしゃるが、本当に無償化がいいのか。大学に行くと所得が上がるから、行かなかった人と所得の差がついてしまい、大学に行かなかったのに大学に行った人の負担をすることになるのかという、不公

平の問題もある。海外を見てみると、親の負担にならないように、出世払いにするとかいろんなやり方があると思う。どれもあったら嬉しいが、効率的なお金の使い方を、政治家や行政には考えていただいて、うまく県民の税金を活用し、子育てしやすい県にしていって欲しいなというふうに思う。

犬山：　財源をどうやって持ってくるかについて、みんなから徴収するのか、それとも階段をつけるのか、財源の見直しで生み出すのか、いろんな方法があるので、山口先生がおっしゃったが、そのあたり政治家の方々のお仕事でもあると思うので効率よくやって欲しい。

　あと医療費助成の拡大は、子供の権利にも関わってくる。親の支援というよりは、子供自身が健康に生きる権利について、広島はちゃんと思っていますよというアピールにもなり、それは、そこで育った子供たちにとっても、地元を愛する気持ちも生まれてくるのかなと思う。

吉弘：　掛本さんも、不妊治療について書かれているがどうか。

掛本：　子育て支援の話だから、子供がいること、子供ができることありきで、お話しているが、子供ができるということは奇跡だと私は思っている。私も不妊治療をするなんて思っておらず、女性もしっかり働きなさい、働きなさいと言われて、私自身バリバリ男性と同じように働いて、やっとそこに目が行くようになったら、産みにくい体になっていた。そのようなことは学校でも教えてもらってなかったし、そういうのを早く教えてもらいたかった。あの芸能人は、40歳超えて子供が産まれました、というようなニュースなんかを見ると、産めるのは当たり前だと思うが、そうではない。不妊治療は、すごくお金がかかる。

犬山：　トータルでどれぐらいとかというのは（お話しいただけるか）。

掛本：　私はまだ保険適用が始まっていなかったが、１月に60万円。今回ダメだったので、次の月60万円ですと。でも保険適用がなかった。そのときの広島県の助成のマックスが15万円で、全然足りなかった。そういうこともやってみて分かったので、子供ができるありきでなく、できる前のところを助けてくれたらいいなと思う。

吉弘：　色々な話があったが、知事どうか。

知事：　やっぱりいろんなニーズがあると思う。その中で効率的なお金の使い方という話もあった。ここは難しいところだが、すべてをやれば相当なお金になるが、それも皆さんのご意見をいただきながら考えていく必要がある。もちろんひとつひとつのプログラムを効率的にやっていくということは当たり前のことだが、どれかを選択をしていかなければいけないというところ。それも我々行政とか政治家が決めればいいという話でもなく、皆さんのご意見をこうやってお伺いしながら決めていかないといけないと思う。

吉弘：　ということで今回の議題に関する意見交換はここまでとするが、観覧の方でどなたか感想等あれば伺いたい。

観覧：　今日は様々な方から様々な観点で、子育ての支援の必要性など、教えていただいてありがとうございました。私は将来、薬剤師として働きたく、薬学を学んでいるが、将来職に就いたときに、今ある支援体制なども知った上で、困っている人たちを引き込めるような薬剤師として働きたいなと思う。

（以　上）